

## 博士學位論文要約

論文題目： 自由と解放の身体文化——独立戦争期キューバにおける野球

氏名： 山本 航平

要約：

本論文「自由と解放の身体文化——独立戦争期キューバにおける野球」は、16世紀初頭以来の宗主国であったスペインに対する2度の独立戦争（1868-78年／1895-98年）が勃発した19世紀後半のキューバにおいて、アメリカ合衆国（以下、米国）発祥の文化である野球がどのように表象され、実践されたのかを考察した。現在でもキューバの「国民的な文化」あるいは「国技」として定着している野球が、独立戦争期においていかなる意味を付与された文化であったのかを問うことは、キューバ国民文化の形成という問題に接近するためのひとつの手がかりとなる。

各章で展開した議論の内容については後述するが、まず、本論文の章構成を提示する。

序論（1-15頁）

第1章 近代化と野球（16-42頁）

第2章 スペイン文化からの自立と野球（43-61頁）

第3章 科学・身体・野球（62-80頁）

第4章 キーウエストの亡命キューバ人コミュニティにおける野球（81-101頁）

第5章 人種の境界と黒人野球（102-120頁）

結論（121-124頁）

図表（125-128頁）

註（129-145頁）

参考文献（146-171頁）

以上のように本論文は、序論と結論をのぞき、全5章で構成される。章題に示されているように、本論文は狭義の「スポーツ史」あるいは「野球史」の領域にとどまるものではなく、野球を事例とし、独立戦争期かつ植民地末期のキューバにおける近代化、階級、ジェンダー、ナショナリズム、科学観や身体観、亡命者コミュニティ、そして人種という多様なテーマを照射している。さらに言えば、キューバの野球に関する研究を進めることは、文化を通じたキューバ・米国関係やキューバ人の対米観を探ることと同義である。

キューバで「国民的な文化」として認められている野球が米国発祥の文化であることの特別な意味は、20世紀半ば以降の両国の関係をふまえるとより際立つ。キューバ革命（1959年）の指導者フィデル・カストロ（Fidel Castro）は、自国からわずか150キロの距離にある米国を帝国主義国として糾弾し、敵対する姿勢を打ち出した。一方で、若い頃のカスト

ロは熱心に野球をプレーし、2016年に亡くなるまでそのスポーツの愛好者であった。1961年に米国と国交を断絶して以降、政治、経済、文化のあらゆる面で米国の影響力を排除した革命政権下においても、野球が禁止されることはなかった。

従来の歴史研究において、中南米と米国、あるいはキューバと米国の関係は、おおむね政治、経済、外交分野から理解されてきた。米国は中南米諸国に対して覇権を握り、支配—従属の関係を構築したが、アメリカ大陸における「南北問題」は、中南米諸国で民族主義や反米主義が生まれた要因のひとつであった。また、中南米諸国を対象とする研究者は、なぜその地域が低開発に置かれたのか、あるいはその現状はいかにして乗り越えられるのかという問題意識を有してきた。したがって、中南米地域をあつかう研究は、それらを解明しうる政治学・政治史と経済学・経済史が主流であり、文化やその歴史は二次的なあつかいを受けてきた。

米国史研究でも、中南米諸国は「棍棒外交」や「ドル外交」に代表される外交政策や軍事介入、経済投資によって、米国が帝国主義的に支配した地域とみなされた。キューバと米国の関係にかぎっても、軍事介入や砂糖産業などへの経済投資によって米国がいかにキューバに権力を行使したのかという側面や、両国政府の対立や外交交渉の過程が注目を集めてきた。本論文はそれらの研究の意義を否定するものではないが、キューバをはじめとする中南米諸国の歴史を記述する際に、米国の政治的・経済的支配のみを強調するのは、やや一面的であるように思われる。

キューバ文化史研究において米国の影響力に注目したものは、キューバ近現代史研究の大家ルイス・ペレス (Louis A. Pérez, Jr.) らによる研究蓄積があるとはいえ、いまだごくわずかにとどまっている。その理由のひとつとして、キューバ文化がアフロキューバ文化と同一視されてきたことがあげられる。アフロキューバ文化とは、スペインの文化と奴隷貿易によって連れて来られた黒人が持ち込んだアフリカの文化がキューバで混淆して誕生したものを指し、宗教、音楽、芸術、文学などの領域に顕著にみられる。先行研究が指摘するように、キューバではアフロキューバ文化が優位性を保持していると考えられている。アフロキューバ文化が注目・称揚されてきた背景には、キューバではスペインによる植民地支配の開始後まもなく先住民が絶滅させられたために、インディヘニスマ (先住民擁護運動) が勃興したペルーなどの中南米諸国と異なり、ナショナル・アイデンティティの構成要素として「先住民性」を想起できないという事情もあったと考えられる。

しかしながら、キューバ文化について考える際には、スペインかアフリカか、またはその混淆かという図式ではかならずしもその全体像を把握することはできない。キューバ文化史研究でアフロキューバ文化研究が主流であること、キューバと米国の関係が経済、政治、外交面から議論される傾向が強いこと、そしてキューバと米国が歴史的に特異なつながりを結んでいることをふまえると、キューバ人が野球をどのように受け入れたのかを明らかにすることには研究史上の大きな意義がある。本論文は、キューバの文化史家フェリックス・フリオ・アルフォンソ・ロペス (Félix Julio Alfonso López) の野球に関する一連の研究をふまえて、それを批判的に継承・発展させた。

第1章では、キューバ野球の起源や野球が導入された時期に近代化が進んでいたことを確認したのち、野球に興じたのが誰であったのかを、闘鶏のそれと比較しながら論じた。

野球選手、チーム役員、メディア関係者の大半は中上流階級の白人男性だったが、下層階級の人びとや女性も観客としてスタジアムに足を運んでいた。少なくとも男性のクリオーリョ（キューバ生まれの人びと）にとって、「調和」や「協調」を表象する女性が野球に携わっていることは、「粗野」で「前近代的」な闘鶏と比べて、野球がいかに「優雅」で「近代的」であるかを喧伝する根拠になると考えられた。闘鶏を蔑む一方で野球を称賛する言説が生み出された背景には、娯楽や習俗を近代化することで前近代性を克服し、リスpekタブルな市民社会の成立を目指す人びとの思惑があった。

第2章では、野球と闘牛を二項対立的な枠組みで把握していたクリオーリョの言説を分析した。彼らにとって、スペインを象徴する闘牛は「野蛮」や「後進性」を想起させる文化であり、それに対して米国を象徴する野球は「洗練」や「進歩」といった概念と結びつけて語られた。それはどの娯楽が人気を博していたかにとどまらず、当時のクリオーリョが置かれていた社会的・政治的な状況を反映したものであった。クリオーリョが闘牛を糾弾する一方で野球を称賛したことは、自らがペニンスラール（スペインで生まれたのちにキューバにやって来た人びと）より劣位に置かれていることへの不満を表明し、スペインからの文化的自立を宣言する戦術であった。クリオーリョにとって、野球は近代的な国民国家の形成を追求する際の核となったのである。

第3章では、なぜ野球を通じて身体を鍛えることが重要視されたのかを明らかにした。それは医学や「科学」の知見と不可分であり、ゆえに医師や社会進化論を受容した人びとは、野球がいかに意義深いスポーツかをたびたび強調した。社会進化論者にとって、「自然淘汰」や「適者生存」は自然の摂理であり、その法則下で生き残るためには優れた個体でなければならないと考えられた。そのような人びとがもっとも有用な手段として注目したのが、身体と精神の両面を鍛えうる野球であった。野球を実践することを通じて「自然淘汰」の過程で勝利者になる必要があると謳われた背景には、中上流階級のクリオーリョが黒人を含めた下層階級のクリオーリョやペニンスラールに対して抱いていた階級的・人種的な偏見があった。野球がもたらす効用を称賛する言説が生み出されたことは、当時のキューバで近代医学や「科学」が隆盛をみせていたことと密接に結びついていたのである。

第4章では、米国フロリダ州キーウエストのキューバ人亡命者コミュニティにおいて、いかに野球が実践されたのかについて論じた。そのコミュニティに生きた人びとにとって、野球は亡命者同士の紐帯を強化する役割を担っていた。亡命者は、野球の遠征試合を通じて、祖国の人びともトランスナショナルな共同体意識を醸成した。それは、キーウエストとキューバが同じ文化圏を構築し、フロリダ海峡をボーダーランドとする野球＝独立運動共同体が形成されたことを示している。野球の試合であげた利益を独立運動に寄付していたように、キーウエストの亡命者は祖国の独立運動に大きな貢献を果たした。第二次独立戦争の指導者ホセ・マルティ（José Martí）が、エイブラハム・リンカン（Abraham Lincoln）や詩人ウォルト・ホイットマン（Walt Whitman）を通じて米国の「自由」「平等」「民主主義」といった理念にふれたとするならば、キーウエストの亡命者はその真髓を政治思想ではなく野球にみたのである。

最後に、第5章では、黒人がどのように野球に関わっていたのかを検討した。19世紀末に野球をプレーした黒人選手は多くはなかったが、彼らは黒人だけで構成されるチームを

結成し、セカンドリーグなどに参戦していた。しかしながら、黒人が野球をプレーすることを快く思わない白人は一定数存在しており、黒人は 1900 年までトップリーグでプレーすることはできなかった。黒人野球チーム〈サンフランシスコ〉はその壁を破り、黒人チームとして初めてトップリーグに所属したが、その後も「人種」は争点であり続けた。国民統合や国民国家の建設に付随する排除の論理を明るみに出した黒人野球選手は、人種の連帯を通して自らが「黒人であること」を主張することで、白人優位の社会構造の変革を試みたのである。人種間の平等を求めて闘う黒人野球選手の奮闘をたどるなかで、暗黙のうちに黒人隔離を了解する白人社会の本質が浮かびあがった。

全 5 章を貫く問題意識は、独立戦争期のキューバにおいて、野球というテキストにどのような記号性が付与されたのかを探ることで、アフロキューバ文化に着目する傾向が顕著であるキューバ文化史研究に新たな視座を提供することであった。19 世紀半ばまでのクリオーリョは、「キューバ人であること」とは「スペイン人でないこと」だと考えていた。彼らにとって、「キューバ」とは何かを明確にしたうえで積極的に意味づけることは容易ではなく、否定神学的に定義するほかなかった。それを解決する糸口を与えたのが、1860 年代にキューバに持ち込まれ、まもなく爆発的に普及した野球であった。

野球は 19 世紀末のキューバ人が憧憬のまなざしを向けていた米国で誕生した文化であり、彼らは「米国化」することでスペインとの差異を形作ろうとした。しかしながら、結果的にはいわゆる「米西戦争」(1898 年)後に軍政下に置かれるとはいえ、キューバ人は米国への政治的な従属やその支配圏に入ることを望んでいたわけではなく、「米国化」とはあくまでも文化的な意味においてであった。換言するならば、キューバ人は「近代」を体現する米国の文化を借用し、それを介して米国の理念や価値観を参照し、国民国家を形成するプロセスにいた。キューバ人は、スペイン植民地支配からの自立と解放を導く身体文化として野球を規定したのである。

もちろん、キューバの野球にそのような側面があったことを無批判に称揚することは、危険性をはらんでいる。なぜならば、キューバは米西戦争以前から砂糖の輸出を通して経済的に米国に従属しており、米西戦争後は米国の軍政下に置かれて政治的な支配を受けたからである。1902 年の独立後も、キューバは実質的に米国の保護国であり、主権を剥奪されていた。その支配—従属関係は、20 世紀半ばにキューバ革命が起こるまで、半世紀以上も続くこととなる。

他方で、野球に関して言えば、それは米国によって押しつけられた文化ではなかった。従来の研究が米国のキューバ(中南米諸国)に対する経済的・政治的な支配の側面を強調してきたことを念頭に置くならば、米国の帝国主義的な覇権体制が確立していくなかで、その構造下でありながらも「自立的」に米国文化を実践したキューバ人の姿を描き出すことは、中南米諸国と米国、そしてキューバと米国の関係を再考するうえで、重要な意味を内包している。独立戦争期のキューバ人が「自立的」に野球を実践したことは、彼らがその文化を解釈あるいは翻訳し、前近代性の克服＝「進歩」、近代市民社会のモラル＝「洗練」、そして民族の解放＝「反スペイン」といった独自の意味を付与したことから理解できる。

文化とは民族が独立しようとする困難な闘いのなかでこそ形作られるとするフランツ・ファノン(Frantz Fanon)の指摘を念頭に置くならば、キューバ独立戦争とは宗主国スペ

インからの独立を目指した闘いであっただけでなく、キューバ人が自らの文化を形成する契機であったともみなすことができる。独立戦争期を生きたキューバ人の野球選手や野球唱導者とは、スペインからの自由と解放を導き、近代的な市民社会の輪郭を描いた歴史主体であった。

#### 主要参考文献

- Alfonso López, Félix Julio. *Béisbol y estilo. Las narrativas del béisbol en la cultura cubana*. La Habana: Editorial Letras Cubanas, 2004.
- . *Béisbol y nación en Cuba*. La Habana: Editorial Científico-Técnica, 2015.
- . *El juego galante: béisbol y sociedad en La Habana (1864-1895)*. La Habana: Editorial Letras Cubanas, 2016.
- Burgos, Adrian, Jr. “Entering Cuba’s Other Playing Field: Cuban Baseball and the Choice between Race and Nation, 1887-1912.” *Journal of Sport and Social Issues* 29:1 (2005): 9-40.
- Casanovas, Joan. *Bread, or Bullets! Urban Labor and Spanish Colonialism in Cuba, 1850-1898*. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1998.
- Ibarra, Jorge. *Nación y cultura nacional*. La Habana: Editorial Letras Cubanas, 1981.
- Iglesias Utset, Marial. *Las metáforas del cambio en la vida cotidiana: Cuba, 1898-1902*. La Habana: Editorial Unión, 2003.
- Martínez de Osaba y Goenaga, Juan A. *Racismo y béisbol cubano*. La Habana: Editorial de Ciencias Sociales, 2017.
- Pérez, Louis A., *Cuba and the United States: Ties of Singular Intimacy*. Athens: University of Georgia Press, 1990.
- . “Between Baseball and Bullfighting: The Quest for Nationality in Cuba, 1868-1898.” *Journal of American History* 81:2 (1994): 493-517.
- . *On Becoming Cuban: Identity, Nationality, and Culture*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1999.
- Poyo, Gerald E. “Baseball in Key West and Havana, 1885-1910: The Career of Francisco A. Poyo.” *Florida Historical Quarterly* 87:4 (2009): 540-564.
- . *Exile and Revolution: José D. Poyo, Key West, and Cuban Independence*. Gainesville: University Press of Florida, 2014.
- Prado Pérez de Peñamil, Santiago. *Las corridas de toros en La Habana. Una enconada polémica republicana (1902-1959)*. La Habana: Ediciones Boloña, 2018.
- Reig Romero, Carlos E. *Historia del deporte cubano: los inicios*. La Habana: Editorial Unicornio, 2007.
- Riaño San Marful, Pablo. *Gallos y toros en Cuba*. La Habana: Fundación Fernando Ortiz, 2002.
- Salas Rondón, Juan Antonio. “Génesis y difusión de la educación física en Cuba: (1800-1901).” Tesis Doctoral, Universidad de Salamanca, 2009.